

夢のあとさき その4

本日までに、この校長便りにおいて、私の物語を書いてきましたが、私ばかりではなく、木村監督や大場部長、並びに後藤顧問にも、それぞれの甲子園の物語があるのです。その一端を私も知るところにあるわけですが、私一人きりの物語ではなくて、それぞれが複雑に入り組みながら、チーム磐城は構成されているのであり、その場面場面にも、立場が変わると意味が変わり、どちら側からの意見なのかも含めて総合的に判断することが必要です。

また、野球部の卒業生や、3年生を含め現役の生徒たちや、マネージャーにもそれぞれの甲子園があります。そして、全校生徒や同窓生の皆様にも、今回の出場について、ここに至るまでの25年の中には、様々なドラマがあると推察します。

そのすべての物語の先を見ながら、この先のことを進めていければと考えますので、どうぞよろしくをお願いします。

さて、甲子園ばかりが夢の跡先ではありません。今年は、花園100回目の大会です。全国大会出場をしばらく遠慮していたわが磐城高校も、この100回目の花園には、必ず出場していくと信じています。その前哨戦である選抜の県大会での戦績と、今後の大会に蹴る歩みもぜひ注目していただけたら幸いです。

さらには、女子チームの7人制への参加においても、磐城高校は先陣を張りつつ、全国への階段を上っているところです。

硬式テニス部の今後の活躍も期待できます。昨年度末に見た弓道部女子の全国三位入賞の実績が、様々なところに波及していております。

剣道部の今後の動きや、バスケット女子やバレー部、ソフトテニス部、サッカー一部等の動きも注目です。

アンサンブルコンテストにおける吹奏楽部の走り出しも、今後大きな活躍が見込まれています。

本年7月の高月祭に向け、生徒会の組織づくりも始まりました。令和2年度には、3学年ともに7クラスが完成します。平成15年度当初には、3学年ともに10クラスであった磐城高校は、この16年の間に、学年120名、全学年併せて360名の定員減となりました。同時に、PTAの資金や体育文化後援会の資金も、その数に合わせて大きな収入源になっており、今までと同じ活動を支えるには資金不足が垣間見れます。

磐城高校では、それぞれの部活動の活動の状況を垣間見ながら、総数を減少させることを決断し、生徒総会に諮ってまいりました。今後、支出の面を抑えると同時に、収入をいかに確保するかについて大きな議論を交わさなければなりません。

生徒の活発な活動を支え、学びの場を守りながら、学びの質を担保するための仕掛けづくりを始めます。教育課程の改訂と単位制及びコース制への移行を視野に入れ、新しい学校づくりを考えます。中高一貫教育の導入への足掛かりになればとも考えますので、どうぞよろしく願いいたします。